



生き物除草®で草を食むヤギ／近隣住民へ説明会を開き、丁寧にコミュニケーションをとり理解を得ていく。(提供：鹿島建設株式会社)

また、実施の目的、除草効果、住民のヤギに対する鳴き声や臭いなどの不安について説明するヤギフェスを開催し、搾りたてのヤギ乳の試飲など触れ合いの機会を作ることにより好意的な評価が高まるなど、周辺住民の意識の変化が確認されている。

更に予期せぬプラス効果も発生した。ヤギがごみを食べないように注意書きを設置したことにより、ごみのポイ捨てが無くなったという。こうしたヤギやヒツジ、烏骨鶏も組み合わせた緑地管理は、都内の中高一貫校の屋上緑化、豊島区の公園、横浜市緑区の戸建て分譲地、都内の企業所有地、工事現場敷地、メガソーラー施設、都市部の観光農園などへと展開されている。

人と生き物が共生し、人と人をつなぐ

同社は蚊やブヨなどの飛翔性害虫を捕食するコウモリの生息を促すバットボックス、田んぼや畑を屋上に形成する屋上農園、リサイクル資材を用いて地域の植生を再生する屋上はらっぱ®など生態系を活用し触

れ合いの場を形成する屋上緑化の技術をグリーンインフラとして提案している。さらに、K-BECS®（ミミズコンポスト）、ホップ栽培によるグリーンカーテンK-Cowork緑化®など、発生する堆肥や、収穫物の地産地消で地域住民を巻き込んで地域が活性化し、世代を超えた住民同士の交流も生まれ、コミュニティ形成に繋がる事業もある。

今でこそグリーンインフラの言葉が聞かれ、自然や生き物との共生に対する理解が広まりつつあるが、生き物を活用するからこそその課題や事業性の課題にも直面してきた。生き物除草®では生き物の脱走や健康被害を防ぐための柵や水飲み場の設置、対象植物の確認、頭数の管理、投入時期、近隣の畜産事業者や住民への説明、ヤギの角による見学者のけが防止等々、様々な課題に対応してきた。「マネタイズについては、維持管理費用の低減やお金が循環する仕組みの組み込みや、社員のコミュニケーション活性化、生産性や定着率の向上など社会的なメリットを、可能性を含めて丁寧に内外の関係者



ヤギプロジェクト トリプルゼロ／CO₂の排出、騒音、植物性廃棄物が発生しない環境にやさしいトリプルゼロ。(提供：鹿島建設株式会社)

とコミュニケーションし、理解を得ていった」と同社の担当者は語る。

グリーンインフラとしての可能性

これらの生き物による環境負荷の低い緑地管理、生き物の棲み家の設置、建物の緑化などの技術はグリーンインフラ技術として、同社が都市空間で生態系を維持した街づくりをデザインすることに繋がっている。

コロナ禍でライフスタイルが変わる中、生物多様性の保全と顧客のニーズが近づいてきている。真に環境に優しいかという問いに向き合い、経済的効果を生み出しながら、人々に心の安らぎを与えパートナーシップを育むなど社会的な効果も生まれる、社会課題の解決と持続性を兼ね備えた技術が求められている。そうした技術を鹿島建設は提案し、都市において生き物と人々の暮らしが共生し、地域を豊かにすることに取り組んでいる。

(取材協力：鹿島建設株式会社 技術研究所 インフラ研究チーム チーフ 上席研究員 山田順之氏)